

夏休み子どもミュージアム体験講座2023実績報告

寺澤夏菜

はじめに

佐賀県立博物館は1975年に、併設する佐賀県立美術館は1988年に開館し、一体的な運営を行っている。佐賀県立博物館は自然科学・考古・歴史・民俗・美術・工芸分野を展示する総合博物館である。幅広い分野を担っているため、教育普及に関しては多彩な活動を実現させることができることが当館の強みの1つといえるだろう。

佐賀県立博物館の教育普及活動は1997年に開催した「親と子の竹細工教室」が最初である。この年以降には特別展や常設展と絡めた様々な形で教育普及活動を実施。2001年に現在の県内の小学生を対象とする「夏休み子どもミュージアム体験講座」（以下、「こどもミュージアム」である）を多様な講座内容で実施することとなり、現在にまで継続されている。

本稿ではこの「こどもミュージアム」についての2023年度の実践報告（講座内容・事前準備）を行い、今後の博物館・美術館での体験講座について企画する際に、若干なりとも資することができればと考える。

1 講座の概要

講座内容は年度始めに検討を行い、基本的には本館の職員が各講座を担当し、適宜外部講師を依頼して実施している。今年度は1種類の講座に付き2回実施した。実施日は講座内容にもよるが同日の午前・午後、または連続する2日間の午後に実施し、1コマ120分または150分の時間で開催した。

今年度の講座は6種類12講座で実施した。「ハンを使って布を染めよう」・「紙すき体験—和紙のはがきをつくろう！—」・「水墨画を描こう！うちわ絵」・「化石クリーニング」・「竹で食

器をつくろう」・「昔の道具でだっこく体験！」である。

2 ハンを使って布を染めよう

はじめに講師（松浦由佳：工芸）より今回のタイトルにもなっている「ハン（版）」とは何か、昔の人々は版をどのように生活に活かしてきたのかなど館所蔵の歴史・民俗資料や染色資料を例に説明を行った。その内、鍋島更紗は、16世紀末頃～17世紀初頃に創始したとされる。木版摺・型紙摺の技法を合わせた染色品で、現代ではそれらの技法の研究と復元を行った鈴木照次氏の子鈴木滋人氏が木版摺更紗の研究を重ね、今に受け継いでいる。

本講座では、鍋島更紗の技法を題材としており、版の組み合わせによって独自の文様を創ることを目標に各自制作していただいた。

工程概要は、事前配布した版見本を基にデザイン案を検討する時間を設け、デザイン決定後に版押しや布絵具を用いた制作時間とした。



事前準備は、①物品購入、②版の作成、③スタンプ台の作成、④会場設営である。①物品は、A4布バッグ、版を作成するための消ゴム板、布絵具を購入した。②版は大別して、佐賀県の特徴をモチーフとしたものや館蔵品を図案化したもの、図形、日付、アルファベットの5種約150点を当館職員が事前に作成した。③スタンプ台は、適当な大きさの段ボールに布を巻いて

作成した。また、スタンプ台にて絵具を混ぜる際に使用するハケも同様の方法で作成した。今回作成したスタンプ台は、パレットのように参加者が希望する色やグラデーションを作りやすい一方で、既製品と比べ、絵具が乾きやすいことから、霧吹を用いて、乾燥防止に留意した。

④会場設営は絵具、水を使用することから、床にブルーシートを敷き、会場左右にスタンプ作業台、中央に参加者の作業スペースを設けた。布バッグや版の見本等は、事前に受付で配布し、また混雑解消のため、数字とアルファベット専用のスペースも設けた。

3 紙すき体験—和紙ではがきをつくらう！—

はじめに講師（陣内裕美：自然科学）より和紙や原料についての説明を行った。次に紙漉きについて、実践を交えた手順の説明を行い、参加者に実践していただいた。紙漉き作業中は、適宜職員が各参加者の進行具合を確認しながら補助に入り、紙すき体験を行った。

紙すき体験の工程は3段階設定した。まず初めに、館で用意した原料（楮やねり、水）を用いた和紙作りに慣れていただく工程とした。和紙は、漉いても水に戻せば何度でも漉くことができるので、各自納得いくまで1枚目のはがき作りに取り組んでいただいた。次に、ある程度紙漉き作業に慣れた段階で、参加者各自で持参していただいた、飾りとなる材料（シールや押し花、飾り紙等）を和紙に漉き込んだはがきを作製していただいた。そして、最後に染色を添加し、色和紙作りを体験していただいた。各段階に分けた理由としては、和紙の再生可能である特徴や和紙の構造を知っていただく機会とするとともに、初めに紙漉きを繰り返し実践していただくことで、作業に慣れていただくためである。また、同じものを作り続けると、集中が持たない参加者も出てくるので、次の段階を設

定し、各自自身の興味のある材料を取り入れることで、好きなものを使って作る特別感を取り入れるなど工夫を行った。



事前準備は、①原料・材料の準備、②道具の準備、③会場設営である。①原料の楮（こうぞ）とねりは講座の前日までに使用できる状態に下処理をしておいた。②紙漉き用の木枠、材料を溜める桶、装飾用の道具の準備等を行った。③会場にブルーシートを敷き、参加者毎に紙漉き作業が行えるように配置した。

4 水墨画を描こう！うちわ絵

はじめに講師（安東慶子：近世美術）より水墨画とは何かを館所蔵の絵画を例に説明を行った。次に、描く際の様々な筆の技法について説明し、体験していただいた。その後、習った筆の技法を活かし、墨でうちわ用の画仙紙に描いていただいた。描いた絵はうちわ骨に貼り付けるため、ドライヤーで簡易的に乾かした後、ハサミでうちわ骨のサイズに切り、バレンでしわを伸ばしながら、スティックのりで貼り付けた。



事前準備は、①うちわ骨の裏面の制作、②本番用の画仙紙の準備、③会場設営である。①うちわ骨を購入後、裏面に当館のロゴマークが入った紙を貼り付け（×水のり ○スティックのり ◎澱粉のり）、乾かした。②本番用の画仙紙は

うちわを型取れるように実際のうちわの大きさより大きめの長方形に切り取り、準備した。③会場設営は、少量の墨で事足りるが万が一を考え、床にはブルーシートを敷き、机の島を5つ用意した。またその机に墨が付かないように余っていたポスターの裏面を再活用し、貼った。うちわの絵の参考になるように鳥や動物の図鑑や職員が作成したうちわ絵の見本を準備した。参加者の使用道具であるはさみ、スティックのり、ドライヤー（担当者が持参）を前方に用意した。

5 化石クリーニング

はじめに博物館1号展示室「佐賀の自然」の「佐賀の自然マップ」を活用しながら、講師（時貞雄成：自然科学）より佐賀の地質についての説明を行った。次に博物館ピロティにて、原石・化石の解説や道具の使い方を説明した。その後、ハンマー、安全めがね、ブラシ、タガネ（これらは宇宙科学館から借用）を使い、原石から化石を取り出す作業を90分程度体験していただいた。その発見した化石は持参した入れ物に入れて持ち帰っていただいた。今回の体験では、新たな発見につながる可能性のある化石も発見された。



事前準備は、①当日配布する資料の作成（時貞）、②原石の準備、③会場設営である。①配布資料には佐賀県の地質や化石について、化石クリーニングする際の道具の紹介やラベル作成の仕方などを付したものである。②原石は今回3種類を準備した。栃木県にある木の葉化石園から購入した、栃木県那須塩原市中塩原産の泥岩（ブロック状）。また当館職員が宇宙科学館

職員協力のもと、採取した佐賀県唐津市肥前町阿漕産の泥岩、佐賀県唐津市北波多下平野産の砂質泥岩である。③会場設営は野外の博物館ピロティにて実施したため、館の運営や防犯の観点より当日の朝から設営した。会場スペースにブルーシートを敷き、作業していただく所に段ボールと道具一式を置く。また野外ということもあり、熱中症対策として、扇風機と本丸歴史館から借用したミストシャワーを設置した。そして、同定の見本となる化石の標本（宇宙科学館蔵）を設置（長机2台）し、道具や原石を配置（長机3台）した。また原石ごとにラベル記入例を掲示した。

6 竹で食器をつくろう

はじめに担当職員（寺澤）より外部講師（栗山直幸氏）を紹介し、佐賀県の伝統工芸品である西川登竹細工の竹の特徴や構造を知っていただく機会にするとともに、講師に職人技として「二つ割り」・「四つ割り」などを実演していただいた。次に、講師が今回制作する食器の制作実演を行い、その後手順を記載した資料を参考に制作していただいた。制作に使用する竹は講師に採取していただいたもので、その中から太さ・長さ等、自身の制作したいものに合った竹を参加者に選んでいただいた。ノコギリ、小刀を参加者に職員が配布した後に、皿・箸・猪口・取手付きコップを制作していただいた。



事前準備は、①講師との打合せ、②道具の準備、③食器の制作手順の配布資料・見本品の制作、④会場設営である。①講師との打合せでは今回作るものの相談や竹の採取・見本品の制作

依頼を行った。②道具は竹を切るための土台、ノコギリを佐賀県林業試験場から借用し、小刀、紙ヤスリは当館にあるものを準備した。③前日までに配布資料を作成するためにも、見本となる食器を制作した。④会場設営は当日の午前中に行った。床にブルーシートを敷き、竹を切る・割る際に出る木くずの対策を行った。初日の昼頃に講師に2日間使用する竹を御持参いただき、会場に持ち込んだ。

7 昔の道具でだっこく体験！⁽³⁾

はじめに博物館の大展示室「佐賀の民俗」にてワークシート「昔の道具」のP3・4「いろんなくふうがしてあるね！」を解いていただき、講師（松本尚之：歴史）より、答え合わせや各々の昔の道具の小話等の解説を行った。その後、美術館ホールに移動して、米作りがどのようにして行われていたのかをプロジェクターに宮崎安貞著『農業全書』を示しながら、他の釜などの炊事で使用したものなどを紹介した。次いで栗山氏に制作いただいた「扱竹（こきだけ）」を使用して、稲穂から籾を扱き落とす。その扱き落とした籾からすり鉢と軟式野球ボールを使用して籾殻を外す。その後、美術館ピロティに移動し、「唐箕（とうみ）」を使用して残った籾殻などを除去した。玄米は参加者に小袋に分けて持ち帰っていただいた。



事前準備は、前日に扱竹、すり鉢、軟式野球ボール、唐箕や他の民俗資料を美術館ホールに持ち込み、プロジェクターを設置し、当日の朝に稲を運び込んだ。

むすびにかえて

「こどもミュージアム」は応募人数が増加傾向にあることに対する対応、対象学年やチラシを特別支援学校にも配布していることを踏まえた参加しやすい体験内容など、いくつかの課題が見受けられる。

これまでも様々な分野を担う学芸員が在籍することによって様々なことを体験できる教育普及活動を実施してきた。地域の文化や資料に触れることができる教育施設としての特色を活かした、この活動が子どもたちの「遊ぶ」だけに留まることなく、何かを発見する、新しく興味を持つなど実りのあるものにしたい。そのためにもアンケート内容の検討や今回の経験を踏まえた上で、講座の質を向上させ、今後とも実施していきたいと考える。

【註】

- (1) 本稿は、佐賀県立博物館・佐賀県立美術館編集『調査研究書』第47集（令和4年）に掲載した、谷頭舞姫「佐賀県立博物館・佐賀県立美術館の「夏休みこどもミュージアム体験講座」の推移と実践報告」項の講座内容について加筆したものである。同時に参照されたい。
- (2) 本稿で報告した一部のこどもミュージアムでは佐賀県3年経験者研修企業・福祉施設等体験研修及び博物館実習にて受入れた教員の先生及び大学生にも運営の補助に入っていた。
- (3) 現在実施している「昔の道具体験プログラム いなほが米つぶになるまで—だっこく体験—」のもとになっているプログラムである。

【附記】

本稿で報告したこどもミュージアム「竹で食器をつくろう」及び「昔の道具でだっこく体験」で使用する「扱竹」は、現在佐賀県武雄市で竹細工の専門家として活動されている栗山直幸氏に指導及び制作していただいたものである。記して深謝申し上げる。

（てらざわ・かな／佐賀県立博物館・佐賀県立美術館会計年度任用職員）